慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	原身体像へ(1・ 2)
Sub Title	
Author	松尾, 信明(Matsuo, Nobuaki)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2005
Jtitle	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 : 人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.60 (2005.) ,p.130- 132
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	平成16年度[慶應義塾大学]大学院高度化推進研究費助成金報告
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000060-0130

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

また，ラモの医療の利用者の半数近くが腹（ニンガ）の病いの治療を目的としていること，そして利用者全員が吸い出しを受けていること，10 名が吸い出しを受けるのみで治療を終えていることも注目される。ラモの医療の利用者があらかじめラモの医療の内容を知っており，腹に溜まったティブの除去を目的としてこれを利用していることがわかる。さきの「ラダックの民俗宗教レベルにおける信仰」とは「ティブが口から入り腹に溜まるという信仰」といえそうである。

次に，ラモの医療を最初に利用している人もかなりいる一方，半数以上がそれ以前に近代医療やチベット医療を利用していることが注目される。ひとつの医療システムの利用による効果が芳しくない場合，並行して他の医療システムも利用するということがわかる。また，ラモにより近代医療やチベット医療の利用を指示された人も半数近くにのぼる。ラモ自身が他の医療システム利用の指南役になっていることになる。

以上をまとめると，ラモの医療はラダック民俗宗教的な「ティブが口から入り腹に溜まるという信仰」に基づき独自の治療を行うが，その一方で他の医療利用の指南役も担っている。ラモの医療の利用者もまた，ティブの吸い出しを主な目的としてラモの医療を利用するが，その利用の前後には他の医療システムの利用を行っており，そうした多元的な医療システム利用が常態であるといえる。いいかえると，ラモの医療の現場からみたラダックの医療システムは地域内で多元的医療システムを構成しており，それぞれラモの医療と相補的な関係にある。また，利用者の求療行動にも，症状と民俗的信仰に応じて一定の傾向がある一方で，同時に複数の治療システムを利用することが多く，一般に多元的である。したがって，ラダックの医療システムと利用者の動態には一定の傾向が認められるが，同時に多元的で開かれていると結論することができる。病者は，ある医療システムを利用すると同時にそれを結節点として他の医療の可能性を模索し，治癒へ至る過程を多元的に想像することが可能になるのである。

参考文献

Dunn F. L., 1976, *Traditional Asian Medicine and Cosmopolitan Medicine as Adaptive Systems.* In C. Leslie ed. *Asian Medical Systems.* Berkeley: University of California Press.

Kleinman, A., 1980, *Patients and Healers in the Context of Culture.* Berkeley: University of California Press (1992『臨床人類学』大橋英寿ほか訳，弘文堂)

* 慶應義塾大学大学院社会学研究科社会学専攻博士課程

〈原身体〉像へ (I・II)

松　尾　信　明*

0. 「報告書」

前回もそうだったけれども，この「報告書」とされるもので，いったい何を書いたらよいのか，正直よくわからないところがある。明確な指示はなされていない。高度化 20 万円をいただいた 2004 年度，筆者が何を研究し業績として残したか，これを申し述べればよいのだと思い，以下書く。

1.「〈原身体〉像へ――『基層的身体』への，1アプローチ」

筆者は，2004年12月5日，「日本現象学・社会科学会」第21回大会一般報告において，「〈原身体〉像へ――『基層的身体』への，1アプローチ」という報告を行った。その内容は以下である。

現在の社会学理論において不在とされがちな身体として，生体，「原身体性」，内臓系（自律系）という概念に着目する現代の少数の社会学理論が存在する。これらを整理し，これら概念が，デカルトの「原初的概念」(notion primitive) としての心身結合に相当しうることを論じた。筆者はこれらを〈原身体〉をとらえる試みと整理するが，実体的・固定的なものとは考えず，像（作田，1993→2001: 35）としてとらえられるような〈原身体〉=〈原身体〉像へと向かうアプローチを，「身体の社会学」を構想する際に重要だと考え提出した。これは，社会構築主義でも本質主義でもない身体へのアプローチを意味する。社会学における身体論の問題圏の始源，すなわちデカルトの理論を問うことが，身体の始源を問うこと，さらには社会学的思考の始源を問うことと重なること。そして，社会学理論が（改めて）デカルトへと還ること。

発表した内容は以上であるが，決められた発表順序，発表時間が，きちんとまともな形で管理・運営されない場で研究発表を行うのは，もうやめようと思う。自分の研究は自分で守り，進めねばならない。

2.「〈原身体〉像へ――『身体の社会学』への一アプローチ――」

上記発表で提示した論点を整理，よりクリアなものとして，表題の論文を『人間と社会の探究』第59号に投稿，掲載された。

3.「社会構築主義と『濃密な身体』――〈原身体〉像へ (II)――」

バー (Burr, 1995＝1997)，フーコー (Foucault, 1976＝1986) を取り上げ，いわゆる社会構築主義理論の，身体へのアプローチが持つ問題点を指摘した。それは端的には，社会構築主義がデカルトの「原初的概念」としての心身結合をとらえきれていないことによる，精神–身体の二分法を保持，精神は身体より優位にあるという考え方，そしていわば狭い言語観を持つため，その射程が「濃密な身体」(the intensified body) のみに偏っていること。結果，「稀薄な身体」(the rarefied body) にその理論的射程は届かず，身体の二重性=「厚み」が消失してしまっていることであった。

大きくいえば，「心身問題の祖」デカルトに還ることによる，今日の社会学のいわば浮遊し錯綜した理論状況に対しての筆者の異議なのでもあった。「濃密な身体」と「稀薄な身体」とがふたつ合わせ身体であるのと同様，身体を「二者双方とも」(Burr, 1995＝1997: 166) に論じることができてはじめて，それが，社会学的な身体論=「身体の社会学」なのである。現在，理論的に「社会構築的な見方と本質に還元する見方の二元論を脱構築する契機」（竹村，2004: 174）が求められているが，身体の二重性=「厚み」を扱いうる筆者のアプローチは，その契機のひとつとなろう。

表題の論文を，現在投稿中である。

文　献

Burr, Vivien, 1995, *An Introduction to Social Constructionism*, Routledge, London.（田中一彦訳，1997，『社会的構築主義への招待』川島書店）

Descartes, René, 1641, *Meditationes de prima philosophia*.（井上庄七・森　啓訳，1978，『省察』，『世界の名著27　デカルト』中央公論社）

デカルト=エリザベト，　2001，山田弘明訳『デカルト=エリザベト往復書簡』講談社
Foucault, Michel,　1976,　*La Volonté de Savoir* (*Volume 1 de Histoire de la Sexualité*), Éditions Gallimard, Paris.
（渡辺守章訳，1986，『性の歴史Ⅰ　知への意志』新潮社
松尾信明，　2005a，「〈原身体〉像へ――『身体の社会学』への一アプローチ――」，『人間と社会の探究』第 59 号
――――，　2005b　（投稿中），「社会構築主義と『濃密な身体』――〈原身体〉像へ (II)――」
作田啓一，　1993→2001，『生成の社会学をめざして』有斐閣
竹村和子，　2004，「修辞的介入と暴力への対峙――〈社会的なもの〉はいかに〈政治的なもの〉になるか」，『社会学評論　特集・差異/差別/起源/装置』Vol. 55, No. 3, 172-188.

＊ 慶應義塾大学大学院社会学研究科社会学専攻博士課程

生活意識と政治経済構造の関係とその変容

～徳之島町井之川の事例より～

泉　　暁

1.　これまでの研究と生活意識論の意義について

私はこれまで，学部卒業論文「徳之島町井之川の「ハマオリ」行事を通しての人々の生活と関係への考察～人々の生活に接近するための理論考察をふまえて～」や，修士論文「生活意識からみる「親族」関係（鹿児島県大島郡徳之島町井之川の事例より）～「現-場-性」(reality, actuality) 理論の考察へ向けて～」に見られるように，鹿児島県徳之島町井之川を中心のフィールドとして，そこに住む人々の生活に近づくことを目的とし，理論研究も同時に進めてきた。現在は博士学位請求論文において，これまでと同様に徳之島町井之川を中心としたフィールド研究を行い，理論研究として，有賀喜左衛門，宮本常一らの研究を生活意識という観点から捉え直し，自身の「生活意識論」を展開させていきたいと考えている。

そして現在，徳之島町井之川のみならず神奈川県鎌倉市鎌倉山地域の昭和初期を中心とし現在に至る開発と既存の農漁村との関係についての地域研究や，有賀喜左衛門が継続して調査し続けた岩手県安代町石神ムラへの予備調査的フィールドワークなども行っている。それらは，人々が集い住まうことの歴史的変遷，そして現在の生活について，生活意識という観点から捉えようとするためであり，そのための予備考察となるものが，本研究である「生活意識と政治経済構造の関係とその変容」である。

本稿では，まず私の中心のフィールドである徳之島町井之川についての研究の過程を示し，今後どのように研究を進めていくのかということを示していきたい。

私が，徳之島町井之川に研究の意図をもって訪れたのは学部生の頃からであった。徳之島町は 26 集落からなり，井之川もそのなかの一つの比較的大規模な集落であり，島の中東部に位置する。井之川はさらに伝統的に，宝島（ホーシマ）・伊宝（イホ）・佐渡（サド）の 3 地区により構成されており，平成 10 年の時点において 246 世帯，推定人口 602 人である。私の両親はこの井之川で生まれ育ったが，私自身は，ごくわずかしかこの地で生活をしていない。このような微妙な立場にいる自分自身だからこそなしうることがあるのではないかと考え，修士論文においては，自身の生活史の記述も組み込んだ。それは私個人の「主観的」な体験として研究の上で捨象されるものでは決してないと考えている。そして，